The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ウーシアをめぐる二種類のロゴス : ハイデガー哲学におけるアリストテレス解釈から
Author(s)	安里, 淳
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 2009, 43, p. 19-31
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/6067
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ウーシアをめぐる二種類のロゴス

――ハイデガー哲学におけるアリストテレス解釈から――

安　里　　淳

はじめに

ハイデガーの『存在と時間』（1927）は、存在の問い（Seinsfrage）を立てる準備作業として、現存在の基礎分析から始められている。現存在が存在を理解しうるという事実は、存在を問うための唯一の手がかりだからである。ゆえに現存在の存在理解が議論の俎上に載せられることは、私たちにとって当然であるように思われる。しかし、ハイデガーが『存在と時間』の骨組みを描きはじめた当初、存在の問いと現存在とはまったく別の問題圏において扱われていた。どちらの問題も同じようにアリストテレス哲学に端を発するが、存在の問いによって論じられるのは、存在の意味をどのような種類のロゴスから理解すべきか、という問題である。それは形式論理の命題が派生的なロゴスであって、私たちが存在を理解するのは根源的なロゴスだということを明らかにしようとする意欲的な問題である。そのような論述のあとにようやく、新しいロゴス解釈を応用するかたちで現存在分析がなされるのである。

しかし、そのようにハイデガー哲学の代名詞ともいえるような存在の問いがそもそもアリストテレス哲学におけるロゴスについての考察であることは、従来のハイデガー研究においてはあまり論じられてこなかった。したがって本論では全集18巻[1)]所収の講義録「アリストテレス哲学の根本諸概念」（1924年夏学期）と、オスカー・ベッカーによる講義ノート（1921

年夏学期）を手がかりにしつつ存在の問いについてのハイデガーの議論を辿ることによって、アリストテレス哲学において明確に区別されている二種類のロゴスに基礎的存在論への導きの糸を探ることにしたい。

1．「存在の問い」の端緒、ウーシアを問うことへ

ハイデガーの「存在の問い（Seinsfrage）」は、アリストテレスの『形而上学』にある「τί τὸ ὄν;という古い問いは、そもそもτίς ἡ οὐσίαだったのだろう」[2]という一節の考察から始められる。従来、τί τὸ ὄν;は「存在とは何か」、τίς ἡ οὐσίαは「実体とは何か」と訳されてきた。しかしハイデガーによれば、アリストテレスは前者の問いを「存在者とは何か（was ist das Seiende?）」と理解していたこと、またそれが実は存在者を問うものではなく、後者の「存在者の存在とは何かという問い（die [Frage] nach dem Sein des Seienden）」だと気づいていたという（GA18, 26）。存在の問いはまず、存在者の存在を意味するウーシアへの問いから始められるのである。ここで「存在者の存在」と訳されているウーシアという術語は、私たちにとっては哲学用語として馴染み深い名称であるが、ハイデガーの手稿には次のような注意書きが書き込まれている。

> 術語としてのウーシアという語は通常の使用から生じている*。アリストテレスのもとではむしろ、術語的意味と通常の使用とは明らかに相並んでいる。この事実を堅持せよ！逆の派生傾向などない！（GA18,345）
> ［＊の文にハイデガーは下記の注をつけている。Vgl.Rhet.B3[3]，1389b28sq.: ἓυ γάρ τι τῶν ἀναγκαίων ἡ οὐσία.（というのも財産（ウーシア）はぜひ必要なものどもの一つだからであるが[4]］

ここでの『弁論術』の引用からわかるように、アリストテレスはウーシアを「財産」という意味で使用している。当時のギリシャ人にとってウーシ

アという語は財産（Vermögen）の他にも、資産（Besitzstand）、全財産（Hab und Gut）、家屋敷（Anwesen）、家具（Hausgerät）などを意味した（GA18,24）。このようにハイデガーがウーシアの意味を呈示するのは、単純に通常の使用から哲学的な術語としての意味を導きだすためではない。ここで私たちが観取すべきは、それらの通常の使用において存在者の存在が何らかの仕方で在るものとしてすでに特徴づけられているということ、またその特徴がウーシアを術語的に使用する場合にもなお入り混じっているということである（GA18,27）。私たちは存在の問いのために通常の使用におけるウーシアを特徴づける必要があるが、はたしてそのように様々な意味を持つウーシアを定義することができるのだろうか。

> ウーシアという単語の意味が持っている多様性（Vielfältigkeit）のなかに、根拠あるひとつの方向性が獲得されうるのならば、それに関連してまずはウーシアというロゴス（λόγος οὐσίας）が正しく解明されなければならないだろう。・・・よりによってウーシアやその他の基本的な単語が、意味の多義性（Vieldeutigkeit）という欠点を抱え込んでいるからといって、探究の表題としてのその適性を過小評価してはならない。逆だ。すべては意味の多様性（Vielfältigkeit）そのものが理解されることにかかっている（GA18,342）。

ハイデガーがここで「多様性」と「多義性」という単語をイタリックで示し、私たちに注意を促しているように、ウーシアには二通りの捉え方がある。一方は様々な意味を持つウーシアを曖昧な、多義的（vieldeutig）なものとして否定的に捉えることであり、他方は意味の多様さ（vielfältig）として肯定的に捉えることである。そして私たちがウーシアという語の持つ本来の意味を理解することができるのは、後者の場合だとハイデガーは考えている。ウーシアに関してこのような二通りの捉え方があるのは、アリストテレス

哲学で論じられている二種類の説明方式（ロゴス）によるものである。

2．ウーシアと二種類のロゴス

ウーシアについてのロゴスには、第一に生成消滅について考慮しない形式論理において類種として語られるロゴスと、第二には生成消滅について考慮する個体に関するロゴスがある[5)]。

たとえば「それは何であるか」という問いに対して、私たちは問われているＳに属す性質Ｐについて「ＳはＰである」と答える。そのように事柄の内容を変数やアルファベットによって置き換えても成立する形式論理においては、推論の正しさは内容に左右されることなく形式だけで決まる。つまり形式論理において言及されている事柄は生成消滅のない不変のものとして語られているのである。このことは定義（ὁρισμός）を技法上の手段としてではなく、原義に遡って考えるならよりいっそう明らかになる。

定義とはそもそも限界（Eingrenzung）、境界（Begrenzung）を意味する（GA18,17-18）。この原義から考えると、ある事柄についての定義とは、私たちがその事柄の限界を、またそれとは異なる在り方をする事柄との境界を定めているということである。私たちがその事柄について言及する際には、事柄はすでに形を持って出来上がった、完成した（fertig）状態であることが前提されているのである（GA18,35）。例えば、家が製作の途中であるにしても家の形についてイメージはすでに出来ている。「それは何であるか？」と問いかけられたときに私たちが定義する事柄の内容は生成消滅する事物のプロセスではなく、基体（ὑποκείμενον）といわれるように、事物がどのような状態であっても変化しない内容なのである。

そのように事物の生成消滅を考慮しない第一のロゴスに対して、第二のロゴスは生成消滅を考慮するロゴスである。それは私にとって何のために在るのかという目的から、そのつどの経験において感覚される事物につい

て語ることである。私が何か目的というものを持っている以上、私は前もって事物について在るべき姿を描いてはいるが、語られる内容とはここにある事物は私の目的からするとどのように在るのかという事実なのだから、事物はそのつどの状況によって様々な意味をもって現れることになる。

要するに、完成した状態で事柄を捉える形式論理の思考からすれば、様々な意味をもつウーシアは曖昧なものであるが、そのつどの経験から事実を捉えようとする思考からすれば、ウーシアが様々な意味を持つことは肯定すべきことなのである。このことから明らかになるのは、形式論理に基づく定義がひとつの語り方にすぎないということである。ハイデガーは論理（Logik）の語源であるギリシャ語のロゴス（λόγος）について次のように述べている。

> ロゴスはアリストテレスのもとで「概念（Begriff）」を意味するのではない；むしろレゲイン（話す）という動詞とのつながりがあくまで生き続けている。ロゴスは言明（Aussage）を意味する。・・・そもそもアリストテレスは主張する：定義（ホリスモス）はひとつのロゴスである、すなわち「定義（Difinition）」とは、言明のひとつの様式である（OB,14）。

ある事柄を定義するために私たちは概念を用いるが、概念の意味内容はそもそも話しという形式論理以前の言明から生じてきたものであって、初めから概念があったわけではない。そして私たちが形式的に事柄を問いそして答えることができるのは、私たちがすでに事柄について親しみ、その性質を知っているからである。つまり形式論理におけるロゴスにはそれに先立つ解釈があり、その解釈に基づいて「S は P である」という定義ができるのである。

> 我々は形式的な考察を単なる「(形式的に) 提示された［考察］」として引き継いでもかまわない。おそらく「或るものは或るものである (Etwas ist Etwas)」は、もはや根源的ではないのであって、ここにはすでに全くある一定の解釈 (先取り Vorgriff) がある (OB, 16)。

したがって形式論理におけるロゴスは、言及されているものを形式的に提示するにすぎない派生的なロゴスであり、そのつどの事実的な経験における解釈こそが根源的なロゴスなのである。ロゴスのこのような差異に基づいてハイデガーは、根源的なロゴスによって述べられる事柄を「本来的な何=意味 (das eigentliche Was = Sinn)」とし、それから派生する形式論理に基づく定義を「何−規定 (das Was − Bestimmen)」(OB, 18) として区別する。アリストテレス自身は形式的なロゴスによる概念の保持について論究することはなかったが、形式的なロゴスによって単なる定義に陥ってしまうという弊害は、確実にウーシアの概念にも及んでいるとハイデガーは考えているのである。

> なるほど、何であるかを定義すること (Was-Bestimmen) がすべて、本来的な何 (ein eigentliches Was) あるいは「意味 (Sinn)」を定義するものではなく、むしろ［それは］単なる定義にすぎない。というのも定義とは、何ということ (das Was) がどこか別のところから定義されるのではなく、それ自身に拠ってのみ定義されるようなロゴスだからである。定義において私は何であるかについての定義を実行するに止まっていて、この何ということを固く保持している (それがいかにして可能であるのかを、アリストテレスは論じていないが) (OB, 18)。

このような議論からすれば、ウーシアの意味の多様さを肯定的に捉えるこ

と、つまりウーシアの本来の意味が根源的なロゴスによって解されうるということは明らかである。

しかしなぜ、ハイデガーはウーシアの意味の多様さを肯定的に捉えることを必要とするのだろうか。アリストテレスに関する以下の言及から、その動機を汲みとることができる。

> いかにして私は個物を経験するのか？と問うほど、アリストテレスは革新的である。彼は形態的な個々のものを理論から自由に把握することを試みる（OB,17）。

動物学者としての顔を持つアリストテレスにとって、ある動物について何が本質的かを考えることは重要な問題であり、またそのために彼は種的差異による動物の分類を課題としていた。その課題は普遍的なものについての考察であると同時に、環境世界（Umwelt）における特定のこのもの（τόδε τι）と呼ばれるような、個別的な存在者を、経験において認識することを意味している（OB,12）。つまり、特定のこのものは個別的であると同時に普遍的な存在者として把握されなければならないのである。そしてそれはハイデガーにとっての課題でもあった。しかし、はたしてそのような認識は可能なのだろうか。課題の困難さから、ハイデガーは次のような疑問を抱いている。

> しかし、次のことは疑わしい。1）そのように考えられた個物（論理的には限定されない一定の）は、アリストテレスが特定のこのもの（τόδε τι）によって考えていたものなのか？2）その「論理的な」個物によって、例えば歴史的な個物（das historische Individuum）は把握されるのか？（OB,17）。

歴史的個物とは、簡単にいえば時間と空間を持った特定の個物である。そのように論理から自由でありながら、その本質について言及されているような個物がどのように語られるのか。それを明らかにするために、ハイデガーはアリストテレスのもとで形式論理に基づいて特徴づけられたウーシアの諸概念を、形式論理による派生的なロゴスから根源的なロゴスへと引き戻す。つまり、普遍的な語り方からそのつどの経験による語り方へと戻ることによって、ウーシアという概念のなかで、個物について根源的に述べられている事柄を明らかにしようとするのである。

3．存在の新しい語り方

さて、ハイデガーは形式論理に基づいて定義されたウーシアについての諸概念を、根源的なロゴスによって捉え直すことを試みる。その際に前提されているのは、形相と質料に関する議論である。形式論理による思考では事柄を完成した状態で捉えるので、認識されるのは形相だけであり、生成消滅する質料は欠落する。しかし、具体的な個物においては形相と質料は切り離されることはない。ゆえに個別的なものを把握するというハイデガーの意図からすれば、形相だけでなく生成消滅する質料が捉えられなければならないということになる。つまりハイデガーが根源的なロゴスによって新たに捉え直そうとしているのは、生成消滅する質料をそのうちに含むウーシアなのである。

議論の俎上にあげられるのは、形式論理のロゴスによるウーシアの定義である。『形而上学』第七巻第三章によると、ウーシアとは①それが在ったところのものである存在（τὸ τί ἦν εἶναι）、②普遍的なもの（τὸ καθόλου）、③類（τὸ γένος）、④基体（τὸ ὑποκείμενον）とされ、ハイデガーはそれらを① der Ist-Sinn、② das Allgemeine、③ die Gattung、④ das Subjekt / das Substrat と訳している（OB, 16）。

まず、種的差異での定義に用いられる②普遍的なものと③類は、形式論理での派生的なロゴスであって根源的なロゴスではない。したがって、②と③はウーシアの二次的な特徴として削除される（OB,14,16）。

次に、④基体は Subjekt と訳されているように、形式的な論理においては主語である。主語となるものは事物の属性ではなく、独立しているもの（Selbständig）でなければならない。形相についていえば、それは生成消滅せず常に思考によって捉えられるのだから、独立しているといえる。しかし質料は認識によってその型式（μορφή）を与えられるのだから、独立しているとはいえず、したがって基体ではない。基体という概念は質料については語りえない以上、根源的なロゴスにおいてウーシアを論じうるものではない。

だが、基体に関する考察を通して私たちにひとつの手がかりが示された。それは質料が型式（μορφή）を与えられることで認識の対象となる点である。生成という側面から事物を捉えようとする場合には、それが何からできているかという質料についての認識だけでは十分とは言えない。それが何のために存在するかという目的が認識されることで、その目的に応じた適切な型式が質料に与えられた後に、質料が型式に達するまでのプロセスが生成として捉えられるのである。思考においては形相が捉えられるように、個別的なものを把握する場合には型式が捉えられている。「アリストテレスは型式（μορφή）によって、それが在ったところの在るもの（das τί ἦν εἶναι）に思い至る」（OB,18）とハイデガーが述べるのは、個別的なものを把握する場合、型式は質料が生成するための目的因となることを指摘するものであろう。

そして、質料が意味をもって現れてくるのは言明においてである。ハイデガーが財産という意味でのウーシアの通常の使用を例として引用していたのは、質料が目的に適う状態であることが「それは私たちにとっていか

に在るか」という仕方で言明においてそのつど表されるからである。

> 質料は、それは何であるかと問われるのではなく、質料のいかにという規定性（eine Wie-Bestimmtheit）が問題である。質料の本来的な意味は話すこと（λέγειν）から生じる（OB, 12）。

私たちが個別的なものを把握する場合、質料は何であるかという仕方で理解されるのではなく、質料はいかにあるかという仕方で理解される。その理解は私たちにとって存在者はいかにあるかという存在の意味が生じるプロセスでもある。そして質料のいかにという規定性は命題ではなく、むしろ私たちの話すという行為において生じるのだが、命題と根源的ロゴスの文を比較してもそれらの間には事柄の理解の仕方に関して決定的な差異があるにもかかわらず、同じように主語と述語が繋辞（コプラ）の「である（ist）」によって結合していることが見てとられるだけであろう。現代論理学において繋辞の「である（ist）」がとりたてて問題にされないのは、形式論理に基づく定義において事柄はすでに完成した状態で語られるので、もはや繋辞は主語と述語のあいだをつなぐ道具のひとつにすぎないからである。それゆえ個別的なものを根源的なロゴスによって把握するために、私たちは繋辞を単なる道具と見なすのではなく、むしろ存在の意味が生成する現象として理解すべきなのである。したがって、ウーシアの定義で使用されている①それが在ったところの在るもの（τὸ τί ἦν εἶναι）についてハイデガーが der Ist-Sinn という訳語を与えるのは、繋辞 ειναι、すなわち being という動詞の形式によって、言明における be 動詞の多様な語形変化を示唆していると考えられる。

> 「それが在ったところの在るもの（τὸ τί ἦν εἶναι）」という表現は何を意味するのだろうか？考察すべきは動詞の「在る（εἶναι）」と

いう形態だ。動詞のこの形態によって、それが在ったところの在るものとして特徴づけられるウーシアは、話すこと（λέγειν）へ、言明のダイナミズム（die Dynamik der Aussage）へと関係づけられる（OB, 15）。

ハイデガーにとって根源的なロゴスによって捉えられるウーシアとは、私たちを繋辞の現象へと導き、言明のもつダイナミズムを取りもどすことを可能にするものなのである。

おわりに

ウーシアをめぐる二種類のロゴスに関して、質料がいかにあるかを言明しうる根源的なロゴスによって、私たちは存在者の存在の意味を理解していることが示された。しかし繋辞が単なる主語と述語の結合とみなされるなら、私たちは存在の意味を取り逃がすことになる。そのような誤った理解を避けるために必要なことは、言明にそなわる繋辞の多様な語形変化のなかに、そのつど存在者が何のためにあるのかという存在理解を見いだすことである。

このような根源的なロゴスについての考察は、ハイデガーの存在論の基礎としてその後もさらに精度を増し深まってゆく。例えば『存在と時間』において、質料が何のためにという目的から理解されるという認識の構造は道具的存在者の趣向性において論じられており（S.84）、また根源的ロゴスと形式論理のロゴスとの差異は、理論的な命題と解釈の根源的遂行として明確に区別されている（S.157）。しかしロゴスの考察が深まるにつれて、それがどのような解釈によって得られた方法論なのか、もはやその軌跡も見失われるほどにハイデガーはアリストテレスの思考を我有化しており、私たちが見ることが出来るのは幾重にも積み重ねられた思考の一角

でしかない。そのようななかで特にベッカーによる講義ノートは私たちにハイデガーの存在論の根底にある根源的なロゴスというものを追思考する機会を与えてくれた。ハイデガーがアリストテレス自身による哲学に戻るようにと私たちを促すのは、アリストテレス哲学では二種類のロゴスのどちらかが偏重されることなく併存しており、私たちの学問的考察から失われている言明のロゴスに基づいた思考の可能性を示唆するからであろう。しかし、ハイデガーはなぜ繋辞に存在の意味があるのかという問題に関してここでは言及していない。それは現存在分析での根源的ロゴスの応用とともに、今後の課題としたい。

（大学院博士後期課程学生）

注

1） Martin Heidegger, *Grundbegriffe der aristotelischen Philosophie*, Gesamtausgabe Bd.18, Frankfurt a.M.,2002. ハイデガーの著作からの引用は全集版に従い、巻数の後に頁数を示し、文中に挿入する。オスカー・ベッカーによる講義ノートは、 OB という略号の後に頁数を示す。‘Heideggers Aristoteles-Seminare Vom Sommersemester 1921 und vom Wintersemester 1922/23 (Nachschriften von Oskar Becker)’, in *Heidegger und Aristoteles Heidegger Jahrbuch 3.*, Karl Alber GmbH Freiburg/München, 2007.

2）アリストテレス『形而上学』、出隆訳、岩波書店、1959年、第七巻第一章、1028b2sqq. この一節に関して、オーウェンズによるアリストテレス研究でも同様の解釈が為されていることがサドラーによって指摘されている。Joseph Owens, *The Doctrine of Being in the Aristotelian ‘Metaphysics’*, Pontifical Institute of Mediaeval Studies, Tronto, 1978, p.137. Ted Sadler, *‘Heidegger and Aristotle:the Question of being’*, The Athloe Press, 1996, p.46-48.

3）ハイデガーはここでB3、つまり第二巻第三章と指示しているが、正しくは第二巻十二章である。

4）アリストテレス『弁論術』、山本光雄訳、岩波書店、1968年、第二巻十二章、1389b28sqq.

5）『形而上学』、第七巻第十五章、 10339b20sqq.

RESÜMEE

Die Zwei Logoi über Ousia
—Über aristotelische Auslegungen in Heideggers Philosophie—

Jun ASATO

Die Seinsfrage in Heideggers Philosophie ist die Betrachtung zwei Logoi in der aristotelischen Philosophie, was in den bisherigen Forschungen noch nicht erörtert wurde. Heidegger übersetzte die alten griechischen Fragen τί τὸ ὄν; und τίς ἡ οὐσία ; als „was ist Seiende?“ und „was ist das Sein des Seienden?“ ins Deutsche.
Die Seinsfrage lautet „was ist Ousia?“. Wir haben hier zwei Logoi über Ousia. Einerseits werden in beiden Logoi die Begriffe „das Werden“ und „das Vergehen“ außer Acht gelassen und nur das „Fertigstellen“ in formalen Logik betrachtet. Andererseits werden in dem ursprünglichen Logos auch diese beide Begriffe in Betracht gezogen. Heidegger meinte, das der ursprüngliche Logos logikfrei über das „Individuelle“, sowie über „das Werden“ und „das Vergehen“ aussagt.
Wir können seine Auslegungen über Logoi in seiner Vorlesung vom Jahre 1924 „Grundbegriffe der aristotelischen Philosophie“ und in den Nachschriften von Oskar Becker „Heideggers Aristoteles-Seminare vom Sommersemester 1921“ nachlesen.

Stichwörter : Ousia, Werden, Logos, Individuelle